

□朝比奈主筆は米国コケ類学会の名誉会員に選ばれた

The American Bryological Society は朝比奈泰彦博士の地衣類の分類と化学に対する顕著な貢献を考慮して、1964 年 11 月博士を同会の名誉会員に選出した。

○ビルマの植物学界の一端 (金井弘夫) Hiroo KANAI: Recent botanical activity in Burma

1964 年 1 月に 1 週間ほどビルマの Rangoon と Mandalay を訪問する機会があったので、その間に知り得たことを記しておく。

まず Forest Department には小さな Herbarium がある。主任は Maung Gale 氏である。同氏の話によるとビルマには植物学会は組織されておらず、従って学会誌もない。Forest Department の Bulletin は年 2 回発行されている。ビルマで最近活躍している植物分類学者は Rangoon University の D.M. Nath 氏で、1960 年にシャン高原のフロラを発表している。同大学には同氏のコレクションを主とした大きい Herbarium がある。私は時間の関係で Nath 氏には会うことができなかった。なお聞くとところによると、Rangoon University は革命政府の命令で閉鎖されているという。

Mandalay University には大きい Agricultural Herbarium があるというので行ってみたが、第 2 次大戦のためすっかり焼けてしまったと聞かされた。

Mandalay から西へ自動車で半日ほどの所にシャン高原の避暑地 Maymyo があり、そこに Shan State の State Botanic Garden がある。園内は広々としていてよく整頓されているが、樹木はまだ植えかけのものが多かった。ここはシイ・カシ類の自然林とゆるい丘陵地形を利用したもので、*Prunus cerasoides* や *Quercus acutissima* のようなヒマラヤ帰りにはなつかしい樹木も見られた。通りすがりの印象としては、ビルマの植物分類学はインドの直接の影響の下にあるように感じられた。

滞在中に知った人の住所および出版物は次の通りである。

Maung Gale—Silviculturist, Burma Forest Service, 526 Merchant Street, Rangoon.

Dewan Mohinder Nath—Lecturer in Botany and Curator of the Herbarium of the University of Rangoon.

Nath, D.M.: Botanical Survey of the Southern Shan States. Burma Research Society, Fiftieth Anniversary Publications No. 1: 157-418 (1961).

128 頁にわたる管束植物のチェックリスト、土名と学名の索引、Inle Lake の植生 6 頁を含んでいる。

Nath, D.M.: Floral Diagrams, Median Longitudinal Sections and Floral For-

mulae of the Burmese Flowering Plants. 73 pp. (1963).

約 100 種の植物の花部の模式的な図と花式図が見られる。材料は栽培植物が多い。

Hundlay, H.G. and U Chit Ko Ko: List of Trees, Shrubs, Herbs and Principal Climbers, etc. Recorded from Burma with Vernacular Names (3rd Rev. and Enlarged Ed.). 532 pp. (1961).

Part I は学名から植物の生態形, 利用, 産地, 方言などを知る表であり, Part II は土名から学名の索引である。

Rodger, A.: A Handbook of the Forest Products of Burma (2nd Rev. Ed.). 176 pp. (1963).

林業関係者の実務参考書である。

Davis, J.H.: The Forest of Burma.

10 数ページの紹介的なパンフレット。出版年代はノートし損った。

(東京大学理学部植物学教室)

○ネムロシオガマの紅花品 (山崎 敬) Takasi YAMAZAKI: A new form of *Pedicularis schistostegia*

ネムロシオガマは普通は花が帯黄白色であるが, 礼文島には花冠全体が, くすんだ赤褐色のものがある。花の色だけから見ると非常にか変わったものにみえるが, 他の形はネムロシオガマとまったくことならない。赤花のものだけが一つの群落を作っているのではなく, 普通品にまじってみられるということからも, たんなる花の色がわりと思われる。1953 年古瀬義氏が香深で採集し, 地名にちなんでカフカシオガマと名づけている。1964 年大場達之氏はウエンナイで同じものを採集した。

ネムロシオガマは日本では *P. venusta* Schangin. var. *schmidtii* T. Ito の学名が使われていて, シベリアの *P. venusta* の変種としてあつかわれているが, Vvedensky (1955) は, これとはことなるものとして新種とした。日本には *P. venusta* の標本がないので, これに対する正確な批判はできない。両者の分布がはなれていること, シオガマギク属は地域ごとに孤立化する傾向がよいことからして, Vvedensky のあつかいが正しいのではないかと思う。

(東京大学理学部植物学教室)

Pedicularis schistostegia Vved. in Fl. U.S.S.R. 22: 770 (1955).

f. **rubriflora** Ohba f. nov.

Corolla rubra.

Nom. Jap. Kahuka-siogama.

Hab. Hokkaido: Ins. Rebun, Uennai (T. Ohba, Jun. 22, 1964, Typus in Herb. Univ. Tokyo); ibid. Kahuka (M. Furuse, Jul. 1, 1953).